

# 「テレビ報道」の意味を問い直すとき

佐藤 二雄

5月16日、麻原容疑者逮捕でテレビ報道のオウム狂想曲はクライマックスに達した。その夜、全テレビ局が長時間の特別番組を編成した。日頃はオウム教報道に慎重なNHKも、我関せずのテレビ東京も、当夜のオーケストラ演奏には横一線となって馳せ参じた。カクナルウエハ「壇の上」の職業柄やむなく？私もまたフリッパー族よろしくカチャカチャと各チャンネルを渡り歩こうとしていた。どのチャンネルも文字どおりの大同小異、これまでの足取りをなぞり、長かった今日一日をたどっている。そこに登場するのは、何番煎じ・出がらしの映像だけである。いまに及んでとっておきなどない。私たちは馬鹿さかげんで白けているのだが、スタジオの諸氏は至

極まじめになぞっている。特異体質と言おうか、不思議な人たちだ。そのような人たちとつき合っているとこちらまでおかしくなるので、ほどなくスイッチを切ることにしていた。しかし、あるチャンネルにまわした途端に私は釘づけとなった。都庁で爆弾テロがあった模様、という第一報が入ってきたのだ。久しく囁かれてきたいわゆるXデーの夜である。当日は、誰しも報復の意も怖れて、内心の緊張は隠し得なかったところであった。この日だけは帰宅を早めたサラリーマンも首都圏では多かったはずである。そこへ飛び込んできた第一報である、ほつと冷めかけていた緊張が蘇る。当然のことながらフリッピング技術が極度に発揮される。

各局の玄関先を確かめると、たまたま見ていたそのチャンネルの報道体制が最もしっかりしている。臨機の編成で群を抜いた対応をしている。続報が入り次第速報すると宣言したので、かたずをのんで待つ。ほどなく第二報。爆弾は郵便物に仕掛けられていた模様で、少なくとも一人が重傷を負って救急車で運ばれたとのこと。しっかりと抑えた報道で、慎重・正確を極める。スタジオで進行する煎じ薬のほうの効果はまるで色あせ、同時進行で追跡する都庁のニュースを私たちがまた想像で追いかける。こうなると、テレビというメディアの特性「同時性、速報性」が遺憾なく発揮され、それが強力な磁力となって私たちがテレビに引きつける。

第三報。ナント郵便物受付局の消印、差出人の住所氏名、手紙の文面、いづれも明確であるらしい。聞いた途端に私のような素人ですえビックリ仰天した。スタジオには公安に関する専門家中の専門家がいた。彼らは慎重に言葉を選びながらも、消印が昨日井上容疑者が逮捕された地域に近いことの意味合いなどから、水質検査結果の開示を求める文面が都の水がめに毒物を入れるという脅迫を意味することも、万が一の可能性として否定はできないのではないかとという惧れを即座に指摘した。

それ以上の懸念は言外に伏せたが、頭から冷水を浴びた思いの人たちは決して少なくはなかったと思う。さあと立ち上がったものはどうしようもなく座り直した人もいたのではなからうか。しかし、もう一度立ち上がる必要はなかった。軽率妄動するに到るまでもなくすぐに第四報が届いた。それがすべてを救った。表記の住所に実在の人物がいて開示要求をしている事実が判明したこと、災難に遭遇した秘書課長が持っていた郵便物の山の中にその手紙がたまたま混じっていたと考えられること、このことが慎重に念を押して何度も伝えられた。テレビ局の司会者が非常に優

れた報道感覚の持ち主で、判明した事実を繰り返し、惧れと惧れを軽々に結びつけることのないよう求めた。そしてことなきを得た。

ここでまた職業柄？ゴタクを並べさせていただく。'36年に、アメリカで百万人を緊急避難に走らせた、かの名優オーソン・ウェルズの演出・出演のラジオドラマ「宇宙戦争」の大パニックを連想する。格好の材料が事実となって現れた感じで、調査研究にとびついた学者先生たちは、 $R \cdot i \cdot a$  ( $R$ ・デマの強さは、 $i$ ・個々にとつての重要さと $a$ ・中身の曖昧さの積に比例する)という「デマ伝播の基本法則」をつくりあげた。

$i$ はXデーの夜という緊迫度、 $a$ は脅迫内容の謎かけのような曖昧さ、それをかけ合わせた積となる結果に比例するこの夜の流言は、たいへんに大きなエネルギーを秘めていたのである。

当夜の解説者に非を唱えるものではない。

むしろ、冷静沈着に対処した姿勢は、恐れて触れなかった他局の「触らぬ神に……」の態度よりも賞賛されよう。そのうえ、私たちにテレビ報道への対処の心構えを実際に即して教えてくれてもいる。あの一瞬にテレビに向うときの構え方を厳しく問われたのだ。テレビ

に何を期待してスイッチ・オンするのか、その自覚がなければならぬ。漫然と時間つぶしに見ようとする態度ほど危険なことはない。事件と同時に進行する映像と音声で私たちを巻き込んでしまうテレビの影響力の強さ、その呪縛から逃れるためには、それ相応の覚悟が必要なのである。

繰り返す。第三報と第四報との間が予感を招くまでに空いてしまったらどういう事態になったか。第三報で走り出したりする者が現れたらどうなったか。歴史に「はなはない」というものの、このことを私たちは肝に銘じておかねばならない。一言で「テレビ四十年」と呼ばれる慣れ合いの間に、私たちはテレビというものの正体をすで見失っている。テレビに対する正常な感覚を麻痺させてしまっている。世の中はそうそう簡単なことばかりではない。むしろむずかしいことのほうが多いのだ。即反応を強いられるテレビに対しては、ご用心と構えるか、なんとか遠ざかるか、それが賢明というものである。

テレビ全体を考えなければならぬのだが、その中でも特に差し迫って、テレビの報道のあり方を問うべきときに直面していると繰り返し指摘せざるを得ない。